

# What's Eating Gilbert Grape の家族が示す象徴的な問題と解決の方向性

畑 山 浩 昭

## 1. はじめに

ピーター・ヘッジズ (Peter Hedges) の最初の小説である *What's Eating Gilbert Grape*<sup>1</sup> は、1991年に出版された。この作品はその後映画化され、1993年の公開と同時にアメリカや日本で脚光を浴びた。レオナルド・ディカプリオ (Leonardo Wilhelm DiCaprio) やジョニーデップ (Johnny Depp) の出演でも話題となった。<sup>2</sup> この小説のひとつの大きなテーマは家族であり、最初から最後まで、家族を中心とした物語が展開する。本稿は、物語の中での「家族」が示す象徴的な意味に焦点をあて、その問題の本質を分析し、作品が含蓄する解決の方向性について考察するものである。

舞台は、アメリカ、アイオワ州のエンドーラ (Endora) という小さな町。物語の主人公であるギルバート・グレイブ (Gilbert Grape) は20代前半の若者で、町の小さなスーパーで働いている。彼は家族と一緒に暮らしており、母と姉と妹と弟との5人暮らしである。他にも兄と姉がいるが、このふたりは家を出て、別の場所で暮らしている。

父親はギルバートが小学校2年生の時に、自宅の地下室で自殺している。その後、母のボニー (Bonnie) は過食症に陥り、自分では歩けないほどの大きな体となってしまう、家のリビングで座ったままの生活を続けている。姉のエイミー (Amy) は、母親の代わりに、または長女として、家事を主に担当している。妹のエレン (Ellen) は恋愛に興味を持つ年頃で異性との交流がある一方、自立の意味も含めて、アルバイトをしながら生活している。弟のアーニー (Arnie) は重い知的障害を伴っており、家族の誰かが常に面倒を見なければならない状態で、普段は、ギルバートが兄として世話をしている。

エンドーラは小さな町なので、大きな産業もなく、人の移動も少ない。ギルバートにとっては、顔なじみの人々に囲まれて、あまり変化のない生活を送る日々であるが、狭い人間関係の中であっても、男女間や友人間の接触による様々な問題が発生する。ギルバートの毎日は、スーパーで働いて家計を支えること、過食症の母や知的障害を持つ弟の世話をすること、姉妹とうまくつきあいながら家族を守ることなどであり、家族の中の男性としての責任も課されている。したがって、どちらかという自分よりも家族を優先する人生を送っている。

このような状況の中、「町を出て自由になりたい」と思う気持ちを持ちながらも、家族を

---

<sup>1</sup> Hedges, Peter. *What's Eating Gilbert Grape*. Simon & Schuster Paperbacks: New York. 1991.

<sup>2</sup> 1994年のオスカー賞で、ディカプリオが助演男優賞の候補となった。

見放すことはできず、外の世界への一步を踏み出せないギルバートであるが、ある日、よその町からやってきた10代の女性、ベッキー (Becky) と出会う。外部の世界からやってきたベッキーとの交流の中で、自分を見つめ直す機会を得たギルバートの心情が少しずつ変化し、物語の展開とともに、ギルバートの思考や行動も影響を受けていく。物語の後半には母親が急死し、兄弟姉妹だけが残されるが、最後には家を燃やしてしまい、未来に向けた旅立ちを示唆する象徴的なシーンで物語は終る。

若者の「旅」や「変化」「恋愛」「成長」などは、アメリカ文学の伝統的なテーマであることから、この小説も例外ではなく、「家族の困難を乗り越えて成長する若者の物語」という読み方が一般的であるかもしれない。しかし、テキストを注意深く読み込むと、「自分」対「家族」という構図に加えて、哲学的な示唆や、政治的な批判も垣間みられるため、作品の解釈と評価のためには、もう少し異なる観点からの分析が必要であると思われる。

「家族」を通して得られる象徴的な意味を手がかりとして、そのような読みを試みたいと思うが、特に、テキストの中からギルバートの主体的、積極的な内的発話（思考するが表現しないテキスト）を拾い出し、比喩的、象徴的な意味合いを捉えながら、より納得のいく解釈に貢献したい。論点を整理するため、「公平と不平等」「真実と欺瞞」「表面と内面」「男性と父性」という4つのテーマを設定し、実際のテキストを材料としてそれぞれのテーマに基づいて分析することにより、思想的、政治的な読みを深めてみたい。

## 2. 公平と不平等

作者のヘッジズは、家族の崩壊や喪失に生きる若者を描く作家としての地位を築いている。*What's eating Gilbert Grape* の次の作品である、*An Ocean in Iowa* も、同様のテーマに取り組んだものであり、アイオワ州の小さな町が舞台である。そして、主人公が抱く基本的な思いは、人間としての不平等、不公平である。<sup>3</sup>

*What's eating Gilbert Grape* の主人公であるギルバート・グレイブは、人生における不公平や不平等について、次のように述べている。

“I believe Life is full of unfairness” (20).

人生は公平ではないと感じている。自分が生まれてから現在に至るまでの境遇を、物語に登場する他者や、テレビに出てくる一般的な家族との比較対照の中でとらえると、自分は恵まれていないという認識である。この不公平、不平等は、ギルバート自身で解決できるようなものではなく、かなり複雑な問題として描かれている。というのも、ベッキー

---

<sup>3</sup> Roberts, Rex. *Once more, from the heartland*. *Insight on the News*. Apr. 27, 1998. 14, 15; ProQuest Central. Pg.37.

(Becky) との対話の中で、次のような告白があるように、その境遇は簡単には解決できるものではないからである。

Mrs. Brainer had a rule cause of Lance Dodge. Rule was – If you have to go to bathroom before break time you forfeit recess rights. So. 10/13/1973.

Amy=Senior, Student Council Secy. Larry=10th grade, Janice=5th. I was in this room. 2nd grade. Second chair, Fourth row. Tucker in front of me, L. Dodge to my left. I had uneasy feeling about my Dad. Had to get home. Wanted to get home. Momma was in Motley with Arnie for tests. Found out he was retarded that August. I had a sick feeling. . . I had this sick feeling and made plans to run home during recess. But I had to pee so I squeezed my legs so hard. It was 8 minutes till recess when I we my pants. L. Dodge told Mrs. Brainer. I cleaned it up while others went outside. Autopsy determined that about same time my Dad was hanging himself, I was peeing in my seat. H. Ha ha ha he he he he ha ha ha. He ha. (155)

この独白には、この小説が取り組んでいる問題を理解するための最も重要な事実が語られている。まず、(1) アーニーは1973年の8月に重度の知的障害があることがわかり、この日(10月13日)に検査を受けていたこと。(2) この日(10月13日)に、父親が自宅で首吊り自殺したこと。(3) この日、父親が自殺した時間に、ギルバートは学校の自分の机椅子において、粗相(失禁)をしていたこと。

この日、ギルバートは学校にいたが、朝からなぜか胸騒ぎがし、父親のことが心配でしようがなかったので、学校の休み時間を利用して家に帰り、父親のもとに行こうと思っていた。しかし、ブレイナー先生が定めた、ある規則があつて、授業中にトイレに行く生徒は、休み時間を放棄することになっていた。不運にもギルバートは授業中に尿意があつたが、休み時間に家に帰るために、我慢したのである。しかし、休み時間が始まる8分前に、失禁してしまう。左隣に座っていたランスが気づき、そのことをブレイナー先生に伝えたため、ギルバートは休み時間に家に帰れず、自分の粗相の後始末をすることになる。

アーニーが知的障害を有することが原因で、父親が自殺したとは書かれていない。ただし、そのように読んでも不自然ではないような時系列の構成になっている。また、ギルバートが、このような異変に子供心ながら気づいており、なんとかして家に帰ろうとしたところで失禁してしまうことや、ちょうどその時間帯に父親が自殺していたとの記述があることから、この出来事が、結果として、ギルバートにどうしようもない罪悪感を残したであろうことは、容易に推察できる。本人には全く非がないにも関わらず、罪の意識を背負うことになるのである。

父を失った後、24歳になる現在まで、母を精神的に支えてきたこと、家を経済的に支

えてきたこと、また、知能に障害があるアーニーの世話をしてきたことなどが、ギルバートの人生である。母が過食症になり、自分では動けないほどの体になってしまったこと、姉のエイミーが家事中心の生活になったこと、妹のエレンが青春を謳歌できないことなども含め、自殺した父親の代わりとして、ギルバートが家族を背負う形になったのである。

しかし、この状況だけによって「不公平、不平等」というわけではない。ギルバートの心は、さらに複雑な状態にあり、その不公平を解消させない逆説的な思いも同時に持っているからである。まず、アーニーの出生と父親の自殺を関係づけて認識できるものの、父を亡くした悲劇の原因としてのアーニーを、兄として主体的に世話しなければならないという皮肉の関係が生ずるのだ。さらに、父親の自殺時に、自分は失禁していたという事実は、失禁自体は忘れることはできても、父の自殺時に失禁していたという自分を卑しめる原因となる事実は、なかなか解消できない。したがって、このような複雑な思い、または、出口が見つからない、あるいは、解決の方法さえも見つからない状態にいななければならないこと自体を、アンフェア（unfair）と感じているのである。

当然のごとく、この状況から逃れるために、別の状態を空想、切望する。ギルバートは、次のような思いを打ち明ける。

I drive around town and dream about going places. I dream about the kind of families I watched on TV as a kid. I dream about pretty people and fast cars, and I dream I'm still me but my family is someone else. I dream I'm still me.  
(33)

別の場所に行く事や、別の家族でありたいことなどの願望であるが、ここで強調されているのは、「そのままの自分であること」であり、それ以外は別の場所、別の家族、別の状況であることを夢見ている。自分そのものの存在までも恨んでいるわけではなく、どちらかという、自分に苦悩を与える状況、運命に対しての思いである。

ところが、ギルバートは、どこにも行かないし、どこにも行けない。ひとつには、自分自身には全くもって非はないわけで、どこかに行ってしまうことは、非のない自分を否定することでもあるわけだ。いっぽう、どこにも行かないことは、この状態から抜けられないということである。すると、この「状態」を継続させている大きな力が、この物語の問題であることになる。

ギルバートが、どこにも行けないという気持ちを持つ事は、別の角度から見ると理解できる。それは、母親の言葉に代表される、「アーニーを取り囲む家族」という姿である。アーニーの誕生日には、同居している家族に加え、別の場所で生活しているギルバート家の家族（ギルバートの兄や姉）も帰ってくる。アーニーは出生後、長くは生きられないとの見解が医者からほのめかされていたが、物語の中では、18才の誕生日に向けて準備するシーンがかなりのボリュームで綴られている。

これに関し、母のボニーは次のように言う。

I don't ask for much. Just let me see my boy turn eighteen. That's not too much to ask, is it? (29)

母は、多くは望まないと言う。ただ「アーニーが18才の誕生日を迎えるのをこの眼で見たい」と願うのである。この部分を理解するためには、前後の文脈が必要であるが、アーニーの誕生日が象徴的に機能していることを指摘しておきたい。つまり、ひとつには、「家族が集まる、家族としての形が整う」ということであり、夫の死後、崩壊したままの家族が再構築される時でもある。また、「アーニーが生きていること」が、家族の拠り所にもなっている。アーニーは、ある意味で、現状のようになってしまった家族の起因として機能するが、一方で、家族が家族としてなりたつための、家族を構成するひとりひとりの動機や意図でもある。したがって、アーニーの誕生日が、家族にとって、重要な役割を果たすのである。

### 3. 真実と欺瞞

ギルバートは何に苦しめられているのかという本質的な問いに対し、苦悩の原因は、実は「良い人々」であるという見方がある。「善良であること」は、人々を幸福に導くものであると考えられがちであるが、必ずしもそうではなく、ギルバートは善良な人々によって苦悩しているという見解だ。<sup>4</sup>

物語の中で、ランス・ドッジ (Lance Dodge) という人物が出てくる。前述したように、ギルバートの小学校の時から友人で、ギルバートが失禁した時に、先生に報告した人物で、成績も優秀であった。ランスは、エンドーラの田舎町を出て、全米に放送されるニュースのキャスターを務めるまでになった成功者で、クラシックな意味におけるアメリカン・ドリーム象徴でもある。ギルバートの対極にあるような人物である。

ランスについて、ギルバートは次のように述べている。

Now, with a world full of Lance Dodge fans, I find it difficult to decipher the purpose of things. He is as phoney as you can be and everyone wants him, everyone wants to be him, or to know him, touch him. (204)

このコメントによると、ランスは偽善的であるにも関わらず、ランスに人々が集まる事への嫌悪を表している。文中に出てくる *phoney* という語は、嘘、欺瞞という意味で用いら

---

<sup>4</sup> Auer, Jim. *When someone's disorder is doing you in*. Liguorlan. Dec 1998; 86, 12. pg.36

れ、サリンジャー（J. D. Salinger）のライ麦畑でつかまえて（Catcher in the Rye）で頻出する phony と同義である。ギルバートは、言葉にはしないものの、偽善的な物事については強い嫌悪を抱く。したがって、欺瞞的なランズが社会的な成功を収め、多くの人々から人気を得ている状態をみて、物事の実際のあり方について、懐疑的な考えを持つのである。もちろんこれは、ギルバートの運命や現在の状態に対して納得いかない気持ちも含まれていると考えられる。

偽善的な要素を有する人物が社会的に認められていくというロジックで考えると、他の部分にも、同じような事例が認められる。以下は、メイヤー（mayor）であるジェリー・ギャップス（Jerry Gaps）の発言についてのギルバートのコメントである。このコミュニティの首長の発言について、社会的には正しいかもしれないが、内容は偽善的であることを指摘している。

The mayor tells us that all of the costumes were great, that all the kids are winners. If that is the case, then please tell me why we even bother having prizes and ribbons. If everyone is a winner, then what is the point? . . . The point is that the man making the announcement, the mayor of this town, Jerry Gaps, is lying. (175)

これは、アーニーのような知的障害を持つ子供達の仮装大会について、メイヤーが講評したものであるが、そのときに「すべての参加者のコスチュームは等しく素晴らしく、すべての子供達が優勝です」との感想を述べたのである。それに対しギルバートは、「その一方で自分達は勝者に対する商品やリボンをちゃんと準備しているじゃないか」と、その矛盾を批判するのである。もしも、誰もが勝者であるならば、大会を行う意味があるのかと。メイヤーは嘘を言っていることになる結論づけるのだ。

さらに、アメリカ批判まで発展する。アメリカの象徴のような格好をしていたアーニーが、他の子供達と争い競う様子を見て、皮肉にも、「すべてのことにおいて、まるで今のアメリカのようだ」と言い放ったのである。

My brother's costume is the exception. He looks like an American. In fact, he behaves like one. When he tried to pick up the first kid he knocked down, he smashed into several others, it snowballed, chaos ensued. My brother very much resembled America today in pretty much all things. (175)

アーニーは知的障害を持ち、それを本来的な性質としながら他者を暴力でもって倒していく。この行為は、欺瞞的に褒め称えられ、罪のないこととして認識される。アメリカが関わる戦争を連想させ批判しているであろうことは想像できるが、明確に書かれているわけ

ではない。まるで今のアメリカのようだ、との文があるだけである。しかし、「真実は苦悩に導かれ、欺瞞が成功や勝利をもたらす」という現実の世界の有り様について、ギルバートが閉口してしまうことは、この作品の根幹的なメッセージである。

#### 4. 表面と内面

「真実と欺瞞」という構図と似てはいるものの、別の観点として「表面と内面」という構図も可能である。というのも、表面的なコミュニケーションと内面的なコミュニケーションの批判が、いくつかの重要な箇所で行われているからである。ギルバートは、実情を耐え忍ぶため、また、家族内で不必要な問題を起こさないために、思ったことは内面に留め、言葉にも表情にも出さないようにつとめる。

Fortunately I rarely speak what I think. (22)

He says he doesn't see how I can be so cold about it.

I say that if you live with something long enough, it becomes normal. (38)

ギルバートは思っていること、感じていることを直接的に言わないが、言いたくなくて言わないわけではなく、言わないことで得られるひとつの安定を築いているといえる。というのも、上記2番目の引用は、父が自殺したことについて淡々と語る場面であるが、本来であれば苦しみ、悲しみの中で泣き崩れるような状態であっても、感情を押し殺し、そうでないかのように振舞う、つまり、表面上を取り繕うことによって、それがだんだんと、内面に影響し、苦しみから解放される手段であるかのように機能するということである。つまり、思ったこと、感じたことを表現しないのではなく、表現しないことによって、苦悩から自分を解放しようと努力しているのである。

ベッキーは、ギルバートがずいぶん長い間、感情を殺していることを見抜いている。

You stopped having feelings a long time ago. (226)

しかしベッキーは、それを変えようとする。ベッキーは、人間の表面ではなく、中身を重視することが大事であることをギルバートに説き、それが、ギルバートの直面する問題を解決する新たな方法に導くと信じているからである。

I might be now, but one day I'll have blue hair and blotched skin and plastic teeth and maybe one breast left. If the thought of that appeals to you, then

we might talk about hanging out. But if you're into the surface thing, the beauty thing, then I might just have to turn around, snap off your head, and eat you. (41)

It's the insides of a watermelon that are best. Maybe if you expressed an interest in getting to know my insides. (93)

ベッキーとギルバートの恋愛につながるようなインターアクションの中で、ベッキーが口にしたことであるが、どちらも、中身（Insides）の話であり、表面や外見（surface）で判断するようであれば、ベッキーはギルバートとつきあわない。表面的な美しさ、というのは、欺瞞という見方にもつながるのである。ベッキーとギルバートは恋愛を介する仲になる関係ではあるものの、思想的には相容れない関係として見る事ができるのだ。ただ、ベッキーとしては、ギルバートが中身を直視し、本質的な解決に向けて動かなければ、現状からは脱却できないと信じていることになる。

## 5. 男性と父性

父親に対するギルバートの思いを分析することも、この物語を理解する上で重要な作業である。父が自殺した時に、自分は学校で失禁していたという構図から「トラウマ」という語で説明する方法もあるが、それだけでは説明できないギルバートの父に対する思いもある。大人になったギルバートが、男性や父性について考察する場合、どうしても父親と自分との相対的な認識によらなければならない、それは必ずしも父なき後の家族を支えるということだけではなく、それ以上の役割や覚悟を要求される。自分の親としての父と子供としての自分は、トラウマ的な見方で説明できるが、自分自身が父親なき後、父親のようになることは、異なる心持ちで対処しなければならないからである。

この問いを考えるにあたり、まず、「家」が、父親と母親の象徴的なものとして描かれており、特別な意味を持っていることが手がかりになる。

My father built this house with his own hands the year he married my mother, in honor of their nuptials. (43)

結婚の記念に、父親が自分の手で建てた家となっており、この家が持つ意味は、家族にとって非常に大きい。父はその家の地下室で自殺し、母は、父の自殺後、過食症となり、食べ続けてテレビを見る毎日であるが、父の自殺の場所の真上のフロアで椅子に座って日夜過ごす。体が大きくなるにつれ、体重による負荷がかかり、床が落ちそうになっていく。



つまり、父の自殺の場所へ母も吸い込まれるような形になっている。それを食い止めようと、ギルバートと友人のタッカー (Tucker) は、母に気づかれないように、その部分を修繕しようと努力する。これは、英語でいうところのフィックス (fix) である。

Women cook things. Men fix things.

Oh.

This is the way in America. (43)

この会話はエイミーとギルバートの間で行われた何気ない会話であるが、全体の内容を読んだ後この部分を読み返すと、その象徴的な意味はかなり大きい。つまり、女性は料理し、男性は物事を修理する。これがアメリカだというわけだ。文化ともいえるだろう。

父親なき今、物事を修理するのはギルバートの役割で、崩壊しようとする象徴的な「家」を、男性であるギルバートが父性を伴い、修理するのである。母がアーニーの18才の誕生日を迎えることができるように、なんとか家を支える。

一方で、アメリカ批判をしていることから考えると、これ自体がギルバートを苦しめていることにもつながる。父という男性を殺したのも、アメリカであるかもしれない。アメリカを象徴したアーニーの仮装大会のエピソードも前述した。確かに、知的障害を持つアーニーが原因となって、父が自殺したようなロジックもほのめかされる語りにになっているが、以下のような言述もあり、より慎重な解釈を要する。

I've often thought that my dad killed himself because he could see the future.

They say he was the most hopeful man ever. He was apparently a constant

supporter, compliment giver, and always had a kind word for everybody. (49)

人々の話によると、父は非常に希望に満ちた男で、他人にも尽くし、すべての人々に対して、優しい言葉をかけていた人とある。これはしかし、ギルバートが憎む、小学校の担任の先生のブレイナーであり、社会的に成功を収めたランスであり、知的障害を持つ子供達にたいしてみんなが優勝だよと声をかけたメイヤーと同じなのである。これをギルバートは、「欺瞞」であるとし、「不公平な人生や社会」は、その欺瞞に起因しているのである。したがって、上記引用テキスト中の“my dad killed himself because he could see the future”という部分は、良い人であろうと努力した父の言動そのものが、自分自身を破滅に追い込んだということになる。良い国であろうとするアメリカもまた、同じであるかのような意味の発展、派生まで可能にするようなロジックである。

## 6. 新たなパラダイム

ベッキーがギルバートに対して、助言している箇所があり、結果的には、ギルバートが父と同じ道を歩まないように忠告する形となっている。

You don't fix things by destroying them. . . There's a better way. Find the better way. (274)

まず、フィックス (fix) については、男性と父性のテーマで論じたが、ここでは、destroying が何の解決にも導かないことが述べられている。物語から推測すると、家族の崩壊や社会の崩壊、制度の崩壊など、様々な対象が考えられるが、アメリカを象徴的に取り扱っている箇所からみると、アメリカそのものを批判しているようにも受け取ることができる。また、ギルバートの父親は自殺したが、ギルバート自身が同じ境遇の中で生きていく際に、境遇に負けて父親と同じような道に行かないように、better way があるとしている。新しい方法を見出さなければならないと。

「真実」「内面」を押さえ込んで、「感情」を捨て、「無口無表情」で過ごしてきたことへの忠告であるとする、逆に、それらにすべて力を与えることが解決の糸口となる。つまり、真実に忠実で、内面を大事にし、感情を持ち、表現していくこと。これがよりよい方法、新しいパラダイムにつながるという結論に達する。物語の中で数箇所にわたり、アメリカの現状を揶揄するような象徴的な話が出てきたことを考えれば、この better way は、アメリカに対する忠告でもあるのだ。

実は、真実を愛し、内面に正直で、感情を出し、表現している唯一のキャラクターは、知的障害を持つ、アーニーである。物語の最後に、母親が急死し、その体格がゆえに死体を持ち出すにはクレーンが必要で、そんな処遇は受けさせないという家族の判断で、家を燃やしてしまうシーンがある。それまでの象徴的な意味を持つ「家」と「家族」は、それを燃やし尽くすことによってあらたな意味を作り出し、新しい「家」や「家族」のあり方に向かうことになる。最後にアーニーが、see the lights と叫んで物語は終わる。このライトとは、パトカーのサイレンなのであるが、象徴的には、将来への光なのだ。アーニーの純粋な認識が、家族を苦悩から救い出す、新しい家族に向けて一歩踏み出すための入り口を見つけてくれたといってもよい。

したがって、原題の What's eating Gilbert Grape が問いたず、「何がギルバートを蝕んでいるか？」の意味するところは、結局は、phoney となるかもしれない。偽善とか欺瞞とかが正義となりえる社会では、人間が破滅に向かってしまうことを小説として証明するとともに、人に、国家に対する新たなパラダイムへの提言である。その意味で、この小説は、社会的、政治的にも意義を有する作品なのである。